なりたい

人物

村田洋輔（29）会社員

京宮真人（26）会社員

有田史郎（52）村田の上司

○山郭商事・外観

５０階以上のビル。『山郭商事』の看板。

○同・会議室・中

ホワイトボードに「中途入社研修」と書かれている。村田洋輔（２９）と京宮真人（２６）が、１０名弱の社員とともに並んで座っている。村田は前髪を下ろしていて、隣の京宮は前髪を上げている。村田が鞄の中を漁っている。

京宮「あの、これ」

京宮が村田に消しゴムを差し出す。

京宮「消しゴムとか、このご時世使わんですよね」

村田「ああ、ありがと」

京宮「京宮です」

京宮が首から下げている社員証を見せる。

村田「村田です」
村田が首から下げている社員証を見せる。京宮の消しゴムを見ると戦隊モノの消しゴム。
村田「あ、これ、俺も」
村田のスマホの待ち受け画面をみせる。同じ戦隊モノの画像。京宮が笑っている。

○居酒屋・店内（夜）
村田と京宮が向かい合って座る。
村田「これからよろしく」
京宮「お願いします」
村田と京宮、乾杯をする。
村田「お前、すごいな。研修でもバンバン発言するし」
京宮「そんなことないですよ」
京宮は質の良さそうなスーツを着ている。村田は擦り切れているスーツを着ている。

村田「ため口でいいよ」
京宮「３つも上ですよ？」
村田「学生じゃないんだから。それより、よく研修担当に対して意見できるな」
京宮「研修なんて、担当者に“Yes”って言わせるゲームですよ」
村田「えー？」
京宮「そう思えば、楽しくないですか？」
京宮が村田に笑いかけている。村田が京宮の足元を見ると、百合の花のような模様のステッチの茶色の革靴を履いている。
村田「お前、やっぱすげーな！」
村田と京宮、また乾杯をする。

○山郭商事・社内
テロップ「数か月後」
京宮の元に有田史郎（５２）が近づいてくる。
有田「京宮～また契約とったんだって

な！」
京宮「部長、あざます」
有田「1年目でこんなに先方に好かれる
なんて、俺以来か？ははは」
京宮「ざーす」
村田が椅子に座ったままキャスタ
ーで京宮の元に移動してきて、
村田「なぁーまた契約取った？」
京宮がピースする。
村田「もぉーお前ばっか。なんかコツとか
あんの？」
京宮「営業なんて、先方に“Yes”って言
わせるゲームだよ」
村田「なんかお前、研修んときもそんなこ
と言ってたな」
有田の声「おい！京宮！」
京宮「あ、はい！（村田に向かって）ごめ
ん洋輔、今からキャンプのグッズ買い
行かなきゃでさ」
村田「キャンプ？行くの？」

村田が、京宮と有田と交互に指差している。

京宮「お疲れ」

有田の方に駆け寄る京宮。

×　×　×

掛け時計が１１時を指している。

村田の周り以外真っ暗なオフィスで村田はひとり、パソコンを前ににらめっこしている。

村田「ああ～全然提案書まとまんない」

村田のスマホが鳴る。スマホを見ると、有田からのメッセージ。

「まさかお前今仕事してないよな？２２時過ぎての残業は原則なしでよろしく」

村田「あぁ～」

○同・トイレ・（夜）

鏡の前で手を洗い、顔も洗う村田。

鏡に映る自分を見つめる。

○同・社内（夜）

パソコンに向かって座る村田。

有田の声「やっぱ、村田か」

村田が振り返ると有田が立っている。

有田「お前さ、こんな時間まで仕事すんなって」

村田「すんません」

有田「努力するのはいいことだけどさ、このご時世、な」

村田「はい」

有田が村田の隣の席に座る。隣の席は京宮の席であり、戦隊モノの消しゴムが置いてある。有田が消しゴムを手で転がしながら、

有田「本質よ。お客様の目的と本質。それを引き出すの。お客様自身は何が欲しいかなんてわかってないんだから」

村田「はい……」

消しゴムを見る有田。

有田「なんだこの消しゴム」

村田「あ、京宮のです」

有田が消しゴムを見上げながら、

有田「あいつはフッと相手の懐に入り込んで、本音を言わせちゃうんだよなあ。あれは育ちだ。親が美聖堂の役員だし。地頭がいいんだな」

村田「……」

有田「これ、限定品じゃん。そろそろ終電だぞ、帰れ」

有田が帰っていく。

○同・トイレ・（夜）

村田が来る。鏡の前に立つ。水を流し、手を洗う。手についた水を髪の毛に付け、京宮の髪型を真似るように前髪を上げ、鏡をじっと見つめる。

村田「営業はお客様に“Yes”って言わせ

るゲームなんですよ」

恍惚の表情を見せる村田。誰かが歩いてくる靴音がするが、村田は気づかない。村田の背後に京宮の靴が鏡に映っている。

村田「Yes」

振り返る村田、無言で鏡の方に向き直ってから、その場を去る。

○デパート・外観

○同・エスカレーター脇

とんかつ屋から出てくる村田と京宮。とんかつ屋入口のレジで有田が会計をしようと、スマホを何度も端末にかざしている。

有田「こっちの決済は？できない？あー じゃあこっちは？」

エスカレーターの壁が鏡でできている。その脇に立つ２人。

京宮「洋輔さん、この間、僕の真似してま
したよね？」
村田「……なんだよ」
京宮「洋輔さん、僕になりたいんですか？」
村田「は？」
京宮「どんなに願っても他の人にはなれ
ないわけですし。それに、なる必要もな
いですよね！」
村田「なる必要もない？なんだそれ……」
京宮「洋輔さんは洋輔さんのいいところ
あるじゃないですか」
村田「一生この自分でいろってか……わ
かってる」
京宮「……よかったです」
村田「ほんとはそんなこと思ってないん
だろ？」
京宮「……そんなことないですよ」
村田「お前になりたいよ、俺は。俺のいい
ところなんて、あったとしても仕事に
使えると思えん。使えたとしても、それ

はいいことに繋がらない気がする。足元掬われることにもなる気がする。このサイクルから抜け出せない気がする」

京宮「サイクル……」

村田「努力すれば、って言うんだろ？バカにすんなよお前。この会社、どうやって入った？スカウトなんだろ。聞いたよ。俺は採用試験１０社は受けた。ちなみに新卒のときは２００社は受けた。お前、親が美聖堂の役員なんだろ？有田さんが言ってた。地頭がいいってな」

京宮「僕はそんなすごくないですよ」

村田「そうだな、お前なんかなんもすごくない」

京宮「でも、僕に……俺の真似……鏡の前で……」

エスカレーター横の鏡を見つめる村田。鏡越しに京宮と目が合う。

村田「消えろ」

村田が、エスカレーターの鏡に映る京宮に手を伸ばす。

村田「消えろ消えろ消えろ消えろ」

村田がエスカレーターの鏡に映る京宮の顔を手で隠し、鏡は指紋だらけになっていく。